



フェノロサ夫人の

東京日記

Apr. 1897 - May 1900

村形明子 編

岸田夏子 画



五十一、豪華版写真集『日本』(宣教師と改宗者)高嶺母子と小石川植物園へ

一八九七年一〇月二日(土)

豪華な黄金の多忙な一日。午前中衣類の日干し、古トラランクの整理、アーネストのズボンの脚にピンと

正直に言えば——日記や覚書の特権の常として——アーネストも私も、高価で一流と称されていた本の安っぽさと非芸術的印象に驚いた。全十五巻でセットは五百ドルの由。彼は既に沢山売り上げた。この版は全編写真入りで、全く恐るべき彩色もふくまれている。キャプテン・プリンクリーの本文は辛辣なジャーナリストの文体、本全体が大きな失望だ。

ミレット氏は快活で陽気、生姜風味糖蜜入りクッキ―とチーズストローが気に入り、私たちは皆お茶を飲んだ。その後アーネストはプライベートな話合いの邪魔をされないよう、彼を二階へ案内した。その間アンと私はお濠端の散歩に出、その美しさを楽しみ、そろそろ来る筈の「アーティ」ボーイ「アーサー」を待った。

ちようど幸運にも、鷺が二羽、老松の長く地へくねる緑のビロードの枝に意識的に絵画的な姿勢をとって止まるのを見ることができた。また東京ではとても珍しい光景——鶴の飛翔——も目にした。その大きく広

裁縫で折り目を付け、小さな私室を完璧に整頓して過ごした。私の客間にカケモノ(掛物)が掛かりマントルには飾り布が垂れ、今や宝石のようだ。絨毯とカーテンを整えたら、やがて得もいわれぬ趣になる筈。昼食直前支払いを済ませた——憂鬱な義務。内訳は次の通り。

- スズキ 二九 八〇
- 料理人 一四 三九
- 亀屋 四三 七一
- 家賃 六〇 〇〇
- 召使、俵屋等 五〇 一〇
- 計 一九八 〇〇

これはスズキと料理人に十日と二十日に支払った勘定以外の額だ。全部足すと四十〜六十円に達する。すべてを考慮に入れると、月三百円以下というのささやかなレートでさえ、満足できる生活が保てるわけではない。金に換算すれば小額に見える。

ミレット氏の来訪が直後に予定されていたので、私たちはかなり早目に昼食を済ませた。しかし彼は遅れて四時過ぎまで現れなかった。キャプテン・プリンクリー邸で彼らの本^①について相談していたのだ。豪華版第一巻が私たちの点検用に持参された。

げた翼は、中国古画に示される上方の凹面をそなえていた。長い脚は紐と飾り房のように交叉して垂れ、頸は前へ投げ出されたほっそりと黒い線、その頭上に一^は佩^はの真紅が点じてあった。お濠の僅かな水草の間を、灰色の鴨が二羽泳いだり潜ったりしていた。

多くのセイヨージン(西洋人)——どれも先行者よりさらに醜い——が通り過ぎた。痩せてびったりしたスカートと男靴の、微笑する伝道女がこそごと縮まりのない女性改宗者を従えて通った。日本人キリスト教改宗者をいかに簡単に見分けることができるか、は奇妙な事実だ。改宗者は歩き方から見かけまで一変する。キリスト教の真に誠実な、高揚させる要素がその日本における代表者たちがいかに欠けているか、見るのは寒心の至りだ。その責任が伝道師にあるのか、改宗者のものか、私には分からない。何か欠けているのは確かだ。

西洋人の間で他より見栄えのよい一団が目に入った。やがてナツプ夫妻とキャリーと分かった。私たちに会

(1) Francis Brinkley, ed. *Japan, described and illustrated by the Japanese, with an essay on Japanese art. Written by Eminent Japanese Authorities and Scholars.* Boston: J. B. Miller, (1897). 10 vols. プリンクリー編『日本文化・風習の紹介』岡倉の美術解説を加え、小川一眞のコロタイプ写真、玉村康三郎写真館の手彩色写真、複製版画や和文様見本等を満載した豪華な集大成。二十世紀初期にかけて、デラックス版から簡易廉価版まで各種のグレードのシリーズが相次ぎ刊行された。